

正宗白鳥

永井荷風論

永井荷風論

— 文明批評家として

一

谷崎君が『中央公論』に連載していた「私の見た大阪及び大阪人」は、さすがに観察が適切である。関東人と関西人との気質の相違は、昔から世上周知の事で、谷崎君によって新たに発見されたのではないが、年中行事や、日常の生活振りについて、東西の相違を説き来るところに、芸術家ならではの言い現し得ない妙味がある。世路の

経験に老熟しているこの論者は、関東人が一概に関西氣質を侮蔑するような浅薄な態度を採っていない。それで、三月号所載の分をも、私は首尾を通じて面白く読んだがそのうちで、「敗残の江戸っ児こ」について説かれているところが、特に私の心に引つかかったので、そこだけは、再び読み返して考えた。「東京の下町には、いわゆる、敗残の江戸っ児という型に当てはまる老人がしばしばある。……正直で潔癖でおっくうがり屋で、名利に淡く、人みしりが強く、お世辞をいうことが大嫌いで、世渡りがまずく、だから商売などをしてても他国者の押しの強い

のとはとても太刀打ちすることが出来ない。そんな工合
いで親譲りの財産も擦^すってしまい、老境に及んでは孫子
や親類の厄介になるより外ないが、当人はそれをあなが
ち悲観しない。……ハタから見ると何を楽しみに生きて
いるのか分らないといたいだが、当人は天成の楽天家で
あるから、決して世を拗^すねたり他人の幸福を嫉^{ねた}んだりし
ない。……そういう老人が、東京の古い家なら、一家一
門の間に必ず一人ぐらいいはいるもので、……悪くいえば
生存競争の落伍者であって、彼らが落伍したのはぐうた
らで、見ようによっては市井の仙人とでもいうべき味が

あり、彼らに接すると、大悟徹底した禅僧などに共通な光風霽月せいげつの感じを受けることがある」と、谷崎君は、そういうタイプの人間を説明し、大阪ではそんな老人に出遇わないし、人に聞いてみても、そういう性格は関西には甚だ稀だといっていると附言して、そこにも東西の気風の際立った相違を認めて、犀利さいりな観察と評論の筆を進めている。だが、私はここに疑惑を起したのだ。私は、中国の田舎に生れ、明治十年代から二十年代の前半にかけて田舎で生長したのであるが、谷崎君の説いている種類の老人は、甚だ稀なところか、ザラにあったように思

い出されるのである。維新の大変革によって、敗残の境地へ追い詰められた者の多かったのは、江戸も田舎も同じことであつたが、その「敗残の田舎っぺ」のなかには、諦めよく呑気に余生を楽しんだ者も少なくなかつた。田舎っぺだから、齒切れのいい都会語は使えず、身装みなりも野暮つたかつたが、しかし、運命に諦めをつけていた心理は同じであつたと思われる。外形は泥くさくつても胸裡に光風霽月を宿していたことは、江戸っ児や禅僧と同じだつたと思われる。今日はそういう気持の老人は東西を通じて少なくなっているだろうが、昔は関西にも

たしかにあつたのだ。

外国人のうちには、老境に達して落伍しても、天を怨うらまず人を嫉まず、与えられた境遇を樂む者は甚だ稀なようだが、日本では古来都鄙とひを通じて、そういう氣持の老人が少なくなかつた。伝統的ひ日本氣質の現れであつて、この消極的に天命に安んじる態度には、我々は懐しみを覚えさせられるのだ。バルザックなどの小説に、不幸な運命に安んじている男女がしばしば現れているが、彼らは、神に手頼たより、確實に來世の幸福を予想しているもので、彼らから宗教心を奪つたら、その心境は甚だ落莫らくぼくたるも

のとなるのだ。谷崎氏の説いている「敗残児」のような単純で、そして趣味のある楽天家とは異っている。国木田独歩の『二老人』のなかの石井翁の如きは、そういう日本の楽天家型の一つの実例として挙げてもいい。森鷗外の『高瀬舟』の主人公の如きもその型の一人であって、その光風霽月の心境には、著者の感心しているように、我々も感心させられる。永井荷風氏の小説中には、ことにこの種類の人物が、作者の好意と同情に包まれて描かれている。『腕くらべ』の呉山ござんや『すみだ川』の蘿月らげつは、その代表的人物である。東洋流のあきらめを心の底に有も

っている人間は、明治以来の作品のうちにも、その類はなはだ多く、鷗外の他の歴史小説にも露伴の小説にも現れているし、漱石の小説にもその影を見せている。だが、私は、荷風作中の落伍者的人物、「敗残の江戸っ児」的人物に、最も多くの興味を寄せている。あまりにマンネリズムに堕していると思いつながら、そこにある種の愛着を私は覚えている。

私は、『歡樂』や『すみだ川』を読んで以来、荷風氏の筆に成ったものは、殆んど全部を読み尽している。二度三度繰り返して読んだものも少なくない。『西遊日記抄』『ふらんす物語』『あめりか物語』などは、今でもおりおり抜き読みして、この作者に自分の心を托して、青春の境地を窺うことを喜んでいる。ファウストがメフィストに誘われて、未知の社会を覗きに行くようなものである。私は、荷風氏には偶然会って、二、三度他所^{よそ}行きの話をしたことがあるだけで、深い交際をしたことはないが、そのために、かえって氏の作品を縦横自在に翫^{がん}味^み

することが出来るように思われる。作品を通しての荷風氏は、明治以来の作家中、私の頭脳に最も深く印象されている作家の一人である。永井荷風近松秋江小山内薫の三人は、鷗外漱石藤村の文学に対する時とは違った親しみをもって私の心に浮ぶのである。彼ら三人が非常に傑出した文学者であるかどうかは別に研究を要するとして、彼らの感想や行動が私に取っては面白いのである。その風格が面白いのだ。私はこの三人から学ぶところが少なくなかった。

さて、『ふらんす物語』の結末近いところ、「ポート

セツト」の条下に、沙漠の真只中に淋しく勇ましく翻つてゐる土耳其トルコの国旗を認めて、青年らしい感激に陶醉し、熱誠を籠めてその国旗に敬礼し、「自分は土耳其を尊敬してゐる。土耳其はすくなくとも偽善の国ではない。西洋諸国の仲間入がしたいという軽薄な虚栄心に駆られて偽文明の体面をつくろつてゐる偽善の国ではない」といつてゐる。土耳其人は歐洲人に卑しめられてゐる国人であつて、陰險残忍どうもう獰猛神秘の亞細亞人氣質を、歐洲人は先ず土耳其において認め、近年に及んで次第に東方の国々においても認めるようになったのだが、『ふらんす

物語』の著者は、自分の芸術的空想を恣ほしいままにして、フランス、スペインなどの歐洲を極度に讚美するとともに、蒙昧を以て至福とする回教の本国をも讚美している。自国を呪詛じゆそし現代を蔑視し、過去を憧憬し、異郷を地上天国視するのは、東西の文学者に有りがちなことなのだ。が、明治以来の文学者では、荷風氏ほどその感じに没頭して、そこに自己の芸術境地を開拓している作家はない。しかし、この作者は、社会に迫害され故国に容れられなくなつた人ではなく、文壇人としても甚だ幸運であつたのだ。だから、その呪詛の声にしても人生絶望の述懐に

しても、痛切を欠き、どうかすると洒落つ氣を帯びて来るのだが、そこに微温な日本趣味と融け合うところがあって、読者に喜ばれたのである。泉鏡花氏の小説には強権に対する反抗、弱者に対する同情が基調になっている点で、一部の読者に喜ばれていたらしいが、私はそういう鏡花氏程度の倫理観に心を惹かれたことはなかった。里見弴氏のいうところの「まごころ」にも心を打たれたことはなかった。荷風氏の芸術には、正統的にも変態的にも、根底に倫理観のないところに、私は興味を有っている。荷風集は、小説か感想録か、紛らわしいような作

品に富んでいて、一種の道德観みたいなのが頻りに説かれていたが、それは、私の読み方によると、一つの戯れである。詭弁^{きべん}である。氏の芸術の根底になっているとは思われない。氏自身でも、「要するに厭世的なるかかるとる詭弁的精神の傾向は、破壊的なるロマンチズムの主張から生じた一種の病弊であることはよく承知している」といつているくらいだ。岩野泡鳴はデカダン主義を捧持していたが、彼相応の強烈なる倫理観がその作品を貫いていた。荷風氏にはそれが無い。美辞麗句に富んでいるため、やさしい情緒が述べられているため、氏の文学を

甘く思う勿^{なか}れ。氏は冷嘲悪罵を絶えず試みていたのだ。高山樗牛は作家に向って、文明の批評を要求したが、荷風氏ほど現代日本の文明を批評したものはなかった。江戸の芸術や風俗を追慕しては現代を侮蔑し、西洋の生活や芸術に心酔しては現代を擯^{ひん}斥^{せき}するのが例となっているので、その文明批評がどこまで当を得ているか疑わしいのだが、自己の存在している今日に対して一凶に不平を抱いている有様が、執拗にさえ思われる。そこに憎悪の芸術といったようなところがあって、私が荷風集を愛読する所以もそこにあるのだ。「荷風は紅葉と同じことじ

やないか」と、早くから泡鳴はいつていた。武林無想庵の巴里にての気燄録きえんのなかに、辻潤氏との会話を叙して、荷風の江戸趣味なんか本物じゃない、江戸っ児はあんなキザないやみなものじゃないと晒わらっていた。これらの批評も適中していないことはないが、私は紅葉や緑雨や鏡花の小説や随筆に現れている江戸趣味らしいものに、あまり興味を感じないのに関らず、彼ら三作者と同系統と見られる荷風氏の作品には特異の味を覚えている。文明批評として、緑雨のように瑣末な点に止っていないで、もっと核心に向って進んでいる。そして、以前荷風氏のひそ顰

みに倣って、江戸趣味臭い享楽を試みていた年少文学者の浅薄さを思い出すのである。

古きを温ねて新しきを知らんために、今、私は荷風氏の旧作から、自分の好みに適った数篇を選択して読み返した。『新帰朝者の日記』と『監獄署の裏』。この二つは二十余年前の作品であるが、私には、今日の雑誌小説よりも清新な感じがした。あの時分にはさほどに思わなかったものだが、今度は共鳴されるところが少なくなかった。老いてかえって青春の書に共鳴するのだから妙だ。『監獄署の裏』の作者は、帰朝の汽船が神戸に着いた時、

父の命によって出迎えに来た弟の顔を一目見ると、「同じ血から生れて、自分とよく似ているその顔を見ると、何ともいえない残酷な感激に迫られました」といっている。「ああ、人間が血族の関係ほど重苦しく、不快極まるものは無い。親友にしろ、恋人にしろ、妻にしろ、その関係は、如何に余儀なくとも、堅くとも、苦しくとも、それは自己が一度意識して結んだものです。然るに親兄弟の関係ばかりは先天的にどんなことをしても断ち得ないものです。断ち得たにしても堪えがたい良心の苦痛が残ります。実に因果です」といっている。私のいわんと

欲することがいわれているのだ。しかし、この作者自身は、爾来^{じらい}二十余年の世路の辛惨を経た今日、なおこういう考えを有っているであろうか。

「語学の教師になろうか。いや、私は到底心に安んじて教鞭を把ることは出来ない。フランス語ならば、私よりもフランス人の方が更によくフランス語を知っている」 「雑誌記者になろうか。いや、私は自から立って世に叫ぼうとするほど、社会の発達人類の幸福のために夜^よの目^めも眠らず心配しているのではない」といっているなにかは、生活に余裕のある人間にしてはじめていい得る

ことで、そんなことを考えていた日には、誰れだってこの辛い世に生きて行けないのであるが、その言葉は真実である。私なども、そういう消極的の責任感は絶えず有って来たのである。生きるためには、知らざることも知った顔して、今日となったのだが、世上を見ていると、誰れだってそうなのだ。「知らざるを知らずとせよ」という孔子の教えは、固守しがたいのである。私は、フランス文学でもイギリス文学でも、自信のある態度で教壇に立って教えている人々も、時々^{やま}は心に疚しい思いをしているのではないかと疑っている。新聞雑誌の論文や記

事が、その場その場の風次第であるばかりでなく、古来の哲人賢者の言説だって、我々が心魂を打ち込んで信頼すべきものであろうかと、私は疑っているが、荷風氏の作品からも、その気持は汲み取れるのだ。氏の作品には、人間の進歩の希望を早くから否定している。そして、「家族の口はまるで飯を食うのと、生活難を方針なく嘆き続けるためにしか出来ていない」見窄みすぼらしい現代生活をあさましく思っている。そのあさましい生活状態を、何とかして改革して、万人が万人とも毎日面白可笑しく生活されるようにしたいというのが、「賢明なる維新の改革

者」や、現今の社会運動家などの熱望したところであつたらしいが、青年期の荷風氏は「サハラの沙漠に稲の田を作ろうと企てる」のと同様に思っている。絶望感は更に歩を進めて、「永世自然の迫害と戦っている人間に向つて、神に謝せよ、神の光栄を歌えなどと、西洋人は実に妙な宗教を信じたものだ」ともいつている。『新帰朝者の日記』に散見する現代呪詛の説には、今なお同感者が少なくないだろう。

しかし、如何に絶望哲学を聴かされて同感しても、人間は絶望しないものである。個人は絶望しても人類は絶

望しないで繁殖を続けている。現世が不幸であるなら来世の幸福を夢見て慰めようと企てたりした。モウパッサンや荷風氏に卑まれた種類の生活者も、それぞれに生きることの楽みを覚えていたにちがいない。私は、帰朝の途次、エジプトの沙漠の一端を自動車で通過した時、雄大な眺めに感動するよりも、そこらの土人の生活の、生きるに甲斐なき悲惨さを想像した。暑さが烈しいためか、そこらにいた跣足はだしの少年少女は、顔が干涸ひからびて、若いうちから木乃伊ミイラになっているようだった。しかし、悲惨に思うのは、局外者の妄想で、当人達はそれ相応に浮世を

享樂しているのであるろう。純理の上で人生に絶望しているはずの人間も、水の泡のような歓樂でも見つけて、それに誤魔化されながら生きつづけるものなので、厭世家のシヨウペンハウエルは、快樂主義のエピキュラスよりも長命を貪むさぼった。「カイン」とともに「ドンヂャン」とともに、あるいはわが荷風氏とともに、「昔から人間の守るべきものと定められた教えに服することが出来ず、遂に潔く天罰応報と相争い、相対峙たいじしようと思った」バイロンは、社会に反抗し神に反抗し、ついにギリシヤの独立戦争に加って病没したのであったが、狂的激情を

もっていた彼れは、ようやくそこに死所を、求めたのであった。地上の強権に反抗したって、あるいは天上の全智全能全勇の神に反抗したって、竜車どうろくに向う螻蛄の斧で、要するに甲斐ない仕業であり、自由独立といったような人聞きのいい名目の下に働くのも野暮なことのように、我々の東洋趣味江戸っ児趣味からは、考えられないことではないが、でも、バイロンの奴、ギリシヤの文学美術には年少の頃から心酔していたのだから、その国のために死ぬるのなら、死ぬる張り合いがあったのであろう。美人と道連れなら死んでもいいという訳なのだ。

『新帰朝者の日記』が二十余年前、中央公論に掲げられた時、海外留学の経験を有っていた某大学教授が、「私達も帰朝当時にはこんな感じを持っていました」といつていたが、今日の海外漫遊者も、帰朝直後にはこの「日記」にあるような感じを起されるのである。明治初期の小説を見ると、「パリの花ロンドンの月」を享樂して新知識を蓄積して帰った人物を、羨望と敬意をもって取り扱っていて、今読むと滑稽であるが、荷風氏の「日記」にも、「彼らは洋行した人とささえいえば、希臘ギリシヤの太古から幾千年たった今日までの何から何までを、僅か数年間

に知り尽してしまった人のように思う」といつている。だが、物質文明は、道路でも建築でも、服装でも食物でも、とにかく欧米のものを取り入れて、年とともに自国に適応させるようになったが、少なくとも文学においては、歐洲の文学を理解し、その精粹を充分に味得することは、今日になってもなお困難なので、荷風氏のような鑑賞力の傑れた作家でさえ、その創作には、フランスの匂いは乏しくして、江戸文学の畑に育ったような感じが濃厚なのである。この頃ケーベル博士の感想録を読むと、博士は同僚の大学教授のうち、外国で修業した日本の教授連

にあまり重きを置かず、かえって漢学者根本通明とか、国文学者某とかを尊敬して、本物の学者らしい骨法を備えているといっている。外人だからそう思うのは当然だが、日本人が洋服を着てピッタリ身につかないように、外国の学問もまだ借り物らしいところがあつたのも事実だ。明治大正の文学史を回顧しても、我々は中途半ばの文学境地に彷徨ほうこうしていたような感じがする。自然主義文学がその意気込みほどに効果に富んだ文学を産出しないで読者に飽かっていた時に、荷風氏の江戸趣味文学が、古臭を帯びているにしる、過分に歓迎されたのも、当然

の順序が辿られたようなものであった。文学で名を成すのも時の廻り合せがいいからである。作家の作風や態度が時代の感化を受けて動揺するのは当然であるが、作家自身が周囲の見物を眼中に置いて、わざと奇矯な態度を装うこともあるのだ。不遇な緑雨にもそういうところがあつた。幸運な荷風にもそういうところがあつた。あの頃青年文学者の集会場所として有名だった、「鴻の巢こうのす」というレストランへ、ある日独りで食事に行った時、そここの主人が私に寄せ書帳を見せたが、諸氏の落書のうち、私が今なお記憶しているのは、荷風氏のそれである。

「自然主義の徒、荷風を誅^{ちゆう}せん^{せん}とす」（もつとうまい言葉であつたように思われるが、正確に記憶していない）という意味であつた。自然派系統の批評家から同氏の作品は多少攻撃されていたにしても、私などは『歡樂』や『すみだ川』などの新作を愛誦していた。漱石の『草枕』などより一層強く心を惹かれていた。内田魯庵氏の如きも、荷風の新作をドストエフスキーなど歐洲の大文豪の作品と同様に取り扱い、感激を籠めた文章で、新代の天才を讚美した評論を、花袋氏主宰の『文章世界』に寄稿したほどであつた。そういう作家としての得意時代に、

わざと、「自然主義者どもが寄つてたかつて荷風を倒さんとしている」などといって、やにさが脂下つているのが、人間得意の一変相として、私には可笑しかった。そして、荷風氏の作品は、作家のそういう心理状態の下に、わざと書き曲げられた傾向がないでもなかった。現実描写よりも出鱈目でたらめな空想がいいといったようなことをわざといて見たりしたのである。

全体「ふらんす、あめりかの物語」『西遊日記抄』などには、青年らしい熱情が溢れていて潑刺はっらつとしているのに、帰朝後の創作は隠居じみたところが多くなつたのは、

日本現代の生活の蕪雜俗悪ぶざつに絶望したためであろうか。そういう見方を強調して、一人の文人の生涯を觀察するのは、文学史家や伝記学者の常套であるが、荷風氏の場合など、それ以外に、自分の特色として持て囃された趣味に自分でかぶれ過ぎたところもあるのだ。トルストイがモウパッサンについていった批評は、ある種の流行作家の通弊に適中しているので、ある主義や作風によって名声を得ると、自分でそれに捉われて強いてその態度に拘泥こうでいするようになりがちなものなのだ。多くの作家が、老いて自分の文学生涯を回顧すると、それに気のつくこ

とがあるにちがいない。

三

『歡樂』や『見果てぬ夢』や、長篇『冷笑』は、作者が三十を越して間もない述作であるのに、米仏の物語とはちがって、作者が老境に達したような口吻に富んでいる。そして、客観的描写に乏しくて、主観的感想に満ちているので、連続すると、読者は単調を覚えるのだ。漱石の才をもってしても、はじめのうちの作品には、主観

的感想録のきらいがあり、後年に及んで、世相人事の描写に客観性を帯びるようになった。荷風氏の作品も『腕くらべ』『おかめ笹』に達して、渾然たる小説の体をなした。『榎物語』^{えのき}や『つゆのあとさき』のような最近の作品にも、筆に生彩を欠いても客観性はゆたかになっている。そして、ある種の女性描写をこの作者が最も得意としていたことは小説読者に周ねく知られていた。^{あま}「実際今の世の中に、この珍々先生ほど芸者の好きな人、賤業婦の病的美に対して、賞讃の辞を惜しまない人はあるまい」といっているほどあって、荷風氏の作中の女性は、

大抵芸者あるいは、芸者類似の者であるが、しかし、実際よく注意して見ると、それらの女性の多くは、型の如くで、そんなに生気がないのだ。日本の遊蕩文学としてはこの作家のが第一位を占めている訳だが、遊蕩場の外面描写は巧みであり、遊蕩哲学は委曲をつくして研究されてあり、さまざまな芸者観も集大成されているにかかわらず、遊蕩その物が如実に描かれているところが案外少ないのである。「道楽の面白味といつちや少し変ですが、私は道楽をしない先から、その面白さ楽しさ果敢なさを、あまり誇張して考え過ぎていたんですね。つまり

實際が予想ほどでないことを知ったのです」と、『新橋夜話』のある人物のいつているのは、必ずしも作者の実感であるとは言い難いけれども、少なくとも作品を通じて見たところでは、「面白さ楽しさ果敢なさ」に惑溺した実際の姿はあまり現れていないのだ。泉鏡花氏の作品にもそういうものは出ていない。小山内薫氏の『大川端』の如きは、芸者遊び入門といった程度である。近松秋江氏の過去の小説こそ、それが著しく主観的であり、偏見に富んでいるにかかわらず、遊蕩児の心境を描破して堂に入ったものである。岩野泡鳴の小説にも、蕪雑な描写

のうちに、遊蕩の境地が底深く現れているところがある。遊蕩というものも、人間性の一つの重要な現れだとする。と、江戸の通人の洒落な遊蕩観なんかは、遊蕩の真相を洞破しているのではないに違いない。音楽について何の修養もない私などでも、尺八や三絃の音を聞くと、「われながら解らぬ神秘的な感動を覚える」のは、祖先以来の伝統的趣味が心に宿っているためなので、「遊蕩」について、日本流に芸術化した伝統的趣味があつて、自由奔放であるべきはずの蕩児もそれに捉えられるのである。『冷笑』や『腕くらべ』を読んでも、伝統に捉えら

れたる遊蕩振りの描写によく接するのだ。

『夜明け前』には、上代追慕の熱情が現れていて、そこに日本人としての伝統の力が見られるが、今日のファシズムの気運にしても、日本人の心に潜んでいたものが、表に現れたので、そこに外来思想の模倣とはちがった強みがあるのだ。「余常に伊勢物語を以て国文中の真髓となし、芭蕉と蜀山人の吟詠を以て江戸文学の精粹なりとせり」と、荷風氏がいつているのは、滑稽諧謔をもって、伝統的日本の趣味と見倣したためなので、氏は「南北朝以来戦乱永く相つき、人心諸行無常を觀ずること従つて

深かりしが、厭世思想は、漸次時代の修養を経て、まづ洒脱となり、次いで滑稽諧謔に慰安を求めんとするに至れり」と、狂歌俳諧のたぐいが、日本人の生活と必然の関係を有っていた所以を説明している。日本の精神や趣味に伝統的の意味を求めものも、人によってさまざまである。だが、日本在来の文学演劇などにファシズム鼓吹の傾向が濃厚であつたのは事実なので、それに対立して、滑稽諧謔趣味が栄えていたのだ。これら二つの文学傾向は、明治以来、文壇の表面には現れなかつたが、民衆にはこの種類の文学は喜ばれていた。

ところで、荷風氏の滑稽諧謔趣味には、芭蕉や蜀山人、その他の江戸の通人のそれとは異って、意識的にも無意識的にも、人間憎悪の感じ——現代に生きることの不愉快さがいたる所に露出している。世の中を詰まらなさそうにいつていながら、かえって世を享樂している者もあり、のべつに歓樂を唄いながら、歓樂の真諦を解しない者もある。文学というものは、森鷗外の戯曲『仮面』に現されているように、作者自身の仮面に過ぎないようなことも多い。「達人の主義はその主義を發表せずにつまり自己を晦^{くら}ましている手段を指すんじゃないか」と、『冷

笑』のなかの、貴族的孤立主義の老人についていわれて
いるが、作者は、こういう型の老人を、しばしば作中に
取り入れて、羅月や呉山のような、敗残の江戸っ児的人
物に対すると同様の敬意と同感を寄せている。どちらにも、
マンネリズムに墮していないこともないが、人の世に
——ことに日本の現代に——処する究極の態度をここに
置いているのを面白いと思っている。作者自身はその心
境に達しているのではなく、またその心境に達していな
いからこそ、いろいろな通俗味豊かな小説が書いていら
れるのだが、『歡樂』の作者も、野暮つたい堅苦しい人

生鑑賞の境地を保持していることに、私は心を惹かれるのである。「日本のような道徳的思想と社会的制度の下には是非ともああいう人格が出来なければならぬ」「全体自己の信念とか主義とかいうものは、他の人に発表して説くのはじやない、自分を守る城壁にして置けばいい」という処世観は、東洋では昔から哲人保身の術としていい伝えられたもので、明治時代にも、思慮深きものの取っていた態度であり、今日の時世においても取るべき態度であるらしい。鷗外の『仮面』によって見ると、西洋においても、哲人保身の術は仮面をかぶることにありと

信じている人生の達人もあるのである。

四

私は、夏目漱石の簡単な断片的の日記集や、材料の豊富な書翰集を読んで、明治以来最も多数に読者に喜ばれた名声の高かった作者も、その実生活は平凡無味であつたらしいと想像した。それは氏が物質的に貧乏であつたためばかりではなく、生活態度が学究的であつたためだが、氏などよりも自由な、非学究的な態度を取っていた

作家でも、その生活が、興味ある伝記の題材となるものは少なかつた。それは、日本の文学者が非社会的であり隠遁的であり、あるいは強烈なる個人性を欠いていたためであろう。荷風氏の如きも例外ではないので、『矢筈草』^{やはすぐさ}や『書かでもの記』の如き随筆体の自叙伝を見ても、自然主義作家の平凡な自伝小説に現れている生活とさして異なる所はないのであるが、しかし、凡庸な生活を趣味ありげに書き綴る手腕は、この作者独得のものである。以上二篇の如き、あるいは『日和下駄』^{ひより}などを読むと、明治以来の随筆家としても氏に及ぶものなしと思われる

が、これらの随筆においても、この作者はこの作者らしい仮面を被っているような気がする。この仮面が氏の随筆に妙味を加えているのかも知れない。厨川白村氏の随筆も面白いが、あれは仮面を被らない剥き出しの叙述であるとともに、その心境の浅薄さが感ぜられる。

『書かでもの記』は文飾されてはいるが、この作者の文壇生活記録であつて、明治文学史の史料となるものであるが、漱石の書翰集は一層史料価値に富んでいる。私は、この頃この二つを合せ読んで、史料としての新知識を得た以外に、自分だけの個人的興味を覚えた。自然主

義盛んなりし頃、あるいは衰運きざしていた頃、この系統の作家と作品に反感を抱いていた作家は、漱石を中心とした一団と、鷗外、敏^{びん}、荷風などの一むれであった。

あの時、漱石は、露骨には所感を発表しなかったが、書翰集を読むと、当時の文壇に関心をもっていたことがよく分る。そのおりおりの批判にはなかなか要を得ているところもある。文壇を蔑視していた荷風氏だって、はじめ文壇に出るためには、かなり心を労していたのである。過去の小さな文壇社会にも生存競争はあったのだ。そして、これらの種類の異っていたはずの文学も、今日とな

つては、一様にブルジョア文学として取り扱れるのだから不思議だ。「現代の日本ほど、時間の早く経過する国が世界中にあらうか。今過ぎ去ったばかりの昨日の事も、全く異った時代のように回想しなければならぬ事が沢山ある」と、二十年前に荷風も感歎しているが、その変遷の早さは、今日も以前に劣らないのである。しかし、変遷は必ずしも前進盲進だけではなくって、前へ行ったり後へ帰ったりするものらしい。『夜明け前』に描かれてあるように、維新の改革は復古思想の現れであつたが、最近の文壇にも、一時の盲進から逆戻りして、不思議な

ほど復古的気分が現れているらしい。復古にもいろいろあるが、古事記万葉の精神への復古なんかとはまるでちがった変態的な調子が、文学の評論文学の創作の上に現れて、勢いを得ているらしいのは不思議である。狐にそのままれているような感じがする。ファシズム系統の文学は日本にも以前栄えていた。外国にもキツプリングとかダンヌンチオとかは、そういう男性的戦闘的作品を出して読者を感激させた。しかし、荷風氏もいつている如く、「ダンヌンチオの著作を読むと、紙面に横溢おういつする作家の意気甚だ豪壮なるを感じ……あたか恰も炎天の太陽を望むが

如き」ものが感じられるが、現今の日本文壇のは、そういうものとは似もつかないのである。

新聞雑誌にはその時々々の世相が反射している訳であり、新聞の文芸欄には、その時々々の日本の代表的文学觀が掲げられて居る訳であるが、そう思っていると、今日の各新聞の文芸欄を読んで、我々は狐につままれたような思いをしてばかりいないで、そこに深遠なる意義を認めるように努力しなければならぬのかも知れない。左へ向おうと右へ向おうと、今は民衆の世であるといわれている。文学も民衆のための文学であるといわれている。

政友会が多数を得たのは、民衆が政友会の主義政策に共鳴したのだそうである。夏目漱石でも『彼岸過迄』の序文において、きようあい狭隘なる文壇に迎えられるよりも、東西の朝日新聞の読者に喜ばれることが、作家として遙かに快心事であるという意味のことを述べていたが、そういう快心事を経験しない私にでも、その気持は想像されないことはない。時代の反逆者となるも、その反逆者が世に喝采される程度において反逆するのが賢者の心掛けである。

明治文学中では私の愛読書の一つとなっている荷風集

を、新たに読み返して、そこに現れている反抗気分や、あり余るほどの享樂の描写に接しながら、嚴肅な藤村鷗外などの作品を読んだあとの感じよりも、人生の淋しさを感じた。秋江氏の小説よりもかえって荷風氏の小説において、秋風蕭条しやうじようたる感じが伝えられることがある。そして、生涯の経歴も作風も全然ちがっているはずの私自身の心境が、荷風氏の作品においてしばしば見出されるのを、自分では不思議に思っている。『ふらんす物語』のなかの「雲」の如きは、二十年前に読んで、あの気持に共鳴したと同様に、今日なお共鳴されるのだ。青年バ

イロンが劇詩『カイン』において洩らした悩みが、今日なお生き生きと私の心に触れるのによっても、青年の文学老年の文学の区別を、形式的につけることは間違っているのじゃないかとも思われる。

荷風氏の文学を思い出すにつれて私の記憶に浮ぶ小山内氏は、日本の新時代の生んだ代表的文人の一人である。明治大正に渡つての日本の新文明の所産として、代表的の味いを有っているといつていい。外国渡来の新思想新文学新演劇によつて敏感に心を動かす、気ぜわしく日本にそれを移植しようとして試みたので、詩でも小説でも演劇

でも、評論でも、氏のものは、傍目はためにいかにも新しいと思われそうな新しさを有っていた。しかし、どの方面においても、何となく稀薄なところがあつた。稀薄なところはあつたが芸術に「第一義的」の夢を見、世俗趣味を有しながら、人生永遠の姿に心を注いだりするところに、あの頃に育つた明治の文学青年気質があるので、私など生れた時代が同じいために、氏の心持が理解されそうに思われる。年齢の似寄っていること、文壇に出た時期の同じことは、文学鑑賞の上には微妙な関係があるもので、私は、藤村、花袋、秋声諸氏の作品に対し、あるいは、

谷崎志賀武者小路諸氏の作品に対する時とは、ちがった感じを、荷風青果秋江小山内の諸氏の作品から受けるのである。作品の巧拙如何いかんは別として、好悪の感じが、時代のちがった人のよりも、もっと密接に心に迫るように思われる。

二、三月前偶然大阪朝日を読むと、松居松翁氏が、例の如く歌舞伎を讚美して、「小山内氏などは早くから歌舞伎の滅亡を予想していたが、歌舞伎は今なお栄えていて、かえって小山内氏のやっていた築地の新劇なんかは駄目になったじゃないか」と晒わらっていた。こういう概括

的批評は無論浅薄であるが、新劇に限らず、あの頃の我々文学青年が、自分のため、あるいは日本の新文明新芸術のために、あんな態度で心を労していたことは、幼稚であり愚かであったかも知れない。だが、ああいう時代に、文学志望の青年のうちから、小山内氏のような経路を取った文人のあったことを回顧すると、茫漠たる時代の流れを具体的に見せられているように、私には感ぜられる。努力した事業が効果を収めなかつたにしろ、功利的立場からのみ他を判断することを、私は好ましからず思うのである。

日本文学電子図書館

作家論

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店
2002年6月14日 第1刷

日本文学電子図書館